

## (社) 東洋音楽学会関西支部支部だより

News letter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

### 第35号( 1999/5/10)

#### ★定例研究会のご案内★

#### ■ 第194回定例研究会 (東洋音楽学会・日本音楽学会合同例会)

とき：1999年7月3日(土) 14:00～17:00

ところ：大阪音楽大学K号館(K201号室)

(阪急宝塚線庄内駅下車、北西徒歩8分の本校より13時50分にスクールバスが出ます。徒歩でも5分)

(1) シンポジウム「本土のなかの沖縄音楽文化—関西在住ウチナーンチュ(沖縄人)へのアプローチ」

パネリスト：岩井正浩(神戸大学)、寺田吉孝(国立民族学博物館)、成定洋子

司会：井口淳子(大阪音楽大学)

(2) 島唄ライブ 唄・三線 富里政則(嘉手納出身、大正区在住、三線教室主宰)

#### ● 第195回定例研究会

とき：1999年9月25日(土) 14:00～17:00

ところ：国立民族学博物館 第6セミナー室

(民博北側通用口で、「東洋音楽学会定例研究会出席」と告げて入館ください。)

(1) 研究発表「土地の声とパフォーマンス—ヤップ島の踊りをめぐる考察—」(仮題) 小西潤子

(2) 特別講演「トルコのマカーム研究における歴史の変遷の過程」

(“The process of historical transition in the study of Turkish makam.”)

ロバート・ガーフィアス (Robert Garfias)

(カリフォルニア大学アーヴァイン校人類学部教授/民博客員教授)

(Prof. Of Anthropology. Univ. of California, Irvine)

## ★次回定例研究会によせて★

本土のなかの沖縄音楽文化  
関西在住ウチナンチュ（沖縄人）へのアプローチ

関西、特に阪神間には、多くの沖縄系住民が住んでいる。沖縄本島からの移住の歴史はおよそ80年、現在では、ウチナンチュ2世、3世が育っている。

その代表的、象徴的な集住地域として、大阪市大正区があげられる。彼らは移住してきた当初は、厳しい差別にさらされ、長い間、沖縄文化を「隠すように」守ってきたという。

しかし、芸能面に限ってみるならば、24年前、1975年にエイサー団体「がじまるの会」が設立されている。このことは、当時の沖縄青年たちが自らの民族的アイデンティティを保持、確認、表現する手段として「エイサー」という芸能を選んだ、ととらえられる。エイサーのみならず、三線教室や琉球舞踊教室も近年人気を集め、ウチナンチュに限らず、多くのヤマトンチュ（とくに若者）が沖縄音楽・芸能に親しむようになっている。

エイサー活動だけをとっても25年という歳月が経っているにもかかわらず、これまで、本格的な「関西在住のウチナンチュ」研究が音楽学者によって行われてこなかったのはなぜだろうか。沖縄本島のオリジナルな音楽文化に対して本土のそれは「亜流」であるかのような価値観が働いたのであるだろうか。

ともかく、本土にも沖縄音楽文化が存在すること、そしてそれは、もはや相応の歴史を有し、本島とは別個の独自の文化として育ちつつあることを認めた上で、「研究対象に即した新たな研究方法」が模索されなければならないだろう。

そこで、当シンポジウムでは、あえて、沖縄専門の研究者に限定せず、他の地域を専門としつつ、この問題に有効かつ新鮮な視点をもっておられる方にパネリストをお願いした。フロアとの活発な討論を期待したい。

（文責 井口淳子）

## ★ 定例研究会記録 ★

東洋音楽学会関西支部第192会定例研究会報告  
1999年3月13日(土) 14:00～17:00 奈良県公会堂

報告 澁谷由実

新公会堂への石畳を程良くしめらす春雨が降るなか、例会ははじめられた。岩田氏の研究発表は、声明を含む日本音楽が用いる用語の概念を手がかりとして、鎌倉時代に書かれた『聲明用心集』に初めて確認できる「由」（ゆり）という用語を取り上げ、日本音楽の特性について考察したものであった。「由」という語が持つ「声」および「程」（ほど）の概念は、特定の書籍または特定の時代特有のものではなかったであろう、という岩田氏の推論が、時代の流れを経て概念の範疇や意味内容に変化を来しながらも、今日の日本音楽のうちに生き続けてきているという結論へと導かれた。この結論は、日本音楽の流れを探るうえで、大変興味深いものである。

2月20日からおよそ1ヶ月をついやして行われる東大寺修二会は、いよいよ佳境のときをむかえ、春を待つばかりであった。3月12日の「お水取り」にひきつづき、13日は付帯作法として行われる「達陀」（だつたん）のなかびである。澤田氏による修二会の詳細な手引きを聞き、また準備された資料を片手に二月堂へとむかった。

大松明が縁を走るたびにあがるどよめきを背に、六時作法の初夜、続いてリズムカルな神明帳、そして半夜と、堂内は寸分の隙も感じられぬ程の緊張にこつつまれたまま時は過ぎてゆく。本来修二会は練行衆の内的修行であるという澤田氏の説明通り、堂内の僧は、外野の喧騒をよそに、黙々と行を修しているのであろう。その後、走りの行法、後夜、達陀、晨朝と、六時作法と付帯作法とが交互に修されていくのであるが、報告の任務もそこそこに、西局最前列の座をなげうって帰ってしまった筆者にかわり、友人Mから達陀の報告を。「なんともいえない幻想的な世界！お坊さんが松明を待って、法螺貝の音にあわせて内陣を走るの。何周も何局も1部屋中が火の海！真っ赤に燃え上がっているようなの！見る価値あり」今年見逃してしまったあなた、来年は是非！私も来年は頑張るぞっ！

報告 田井竜一

- (1) 卒論：「京都・六斎念仏の伝承の現状と問題点の研究」糸岡葉子（大阪音楽大学）
  - (2) 卒論：「三味線音楽としての小唄」寺田真由美（神戸大学）
  - (3) 修論：「能囃子の演奏行為について」北見真智子（神戸大学）
  - (4) 修論：「無声映画上演における和洋合奏の演奏実践」今田健太郎（大阪大学）
  - (5) 花会式見学への手引き：「薬師寺の花会式」久保田敏子
- ひきつづき、薬師寺にて花会式見学（18：00～21：30、初夜・半夜）

このところの関西支部の定例研究会は、なるべく行事や芸能の見学等をくみこむ形で設定されており、恒例の論文発表会も、この時期におこなれることになった。年度末でしかも平日という日程にもかかわらず、20名程の参加者があり、盛況であった。藤田隆則氏の巧みな司会と挑発(!?)により、以下の発表がおこなわれた。

糸岡氏は、自らも習得・実演した体験を元にして、小山郷の六斎念仏における伝承のあり方を考察した。そして、その課題として、口承以外の伝承方法の模索（たとえば、譜面化の試み）や、地縁性をはなれた伝承者の獲得・育成等を指摘した。京都の六斎念仏の研究は、連合会による調査報告書の刊行以来、進展しているとはいえないだけに、今後こうした新しい視点によって、研究が続行されることを期待したい。

寺田氏の発表は、文献研究と実践により、本格的な研究がまだなされていない小唄にアプローチしたものである。発表は大きく、「小唄の社会・文化的背景」と「小唄の音楽的特徴」の2つにわかれていたが、報告者にとっては、特に前者での、昭和30年代における小唄ブームの諸相に関する指摘が新鮮にかんじられた。ただし、発表をきく限り、両者を必ずしも融合した議論にはなっていない様にもおもわれた。いずれにせよ、小唄研究はこれからの分野だけに、こうした点をふまえた展開が望まれる。

北見氏の今回の発表は、能の上演における、囃子の奏者間の相互関係に焦点があられた。そして、その場その場での即発的ぶつかり合いを重視し、上演の一回性を追求しているという指摘がなされた。しかしながら、終止抽象的な説明がつづいたため、能の囃子にしたしんでいる者でないと、論旨がわかりにくかったのは残念であった。その意味で、同じく、能の囃子研究に従事している藤田氏の解説およびコメントは、参加者にとって（そしておそらく発表者にも）有益であった。今後は、機関誌などで具体例をまじえながら、成果を発表していただければとおもう。

今田氏の研究は、映画史、音楽史、ポピュラー音楽論等などの分野からぬけおちてしまいがちな、ユニークなテーマをあつかったものであった。映像と音との関係についての理論的な設定をおこなった前半の後、後半では現実感を演出する音の表象体系が再編成されていく過程をしめすものとして、大野政夫の和洋合奏がとりあげられた。そこでは、使用する楽器編成をかえることによって、音の表象を活用している実例が報告された。特に、本来歌舞伎以来の伝統をひきついでいる立ち回りの場面に、あえて邦楽器のみではなく、ブラスバンドバンドの楽器を付加した合奏になっているという指摘は、興味深かった。発表全体では、再編成の過程をおしすすめたのが映像に内在する「フレーム外」の音であることと、その過程において、西欧音楽の導入・実践が大きな役割をはたした点が指摘された。しかし、説明された音の表象体系の運用パターンをみる限りでは、歌舞伎における囃子の使い方との共通点もあり、伝統的な音楽における語法との関係もまた強い様におもわれた。今後は、こうした点もふまえた、よりクロスオーバー的な研究の展開を期待したい。

今回の一連の発表に共通してみられるのは、今までの研究の盲点をつく斬新な視点と、研究者自らが実践もおこなうという姿勢である。これらは総じて現在の音楽芸能研究の一端を如実に反映しているものといえよう。

若い人々の刺激的な発表の後、久保田氏による、簡潔かつ明瞭な「薬師寺の花会式」への手引きがあった。特に氏作成の次第をしるした資料は、実際の見学の際に、進行の状況を把握するのに大変重宝するものであった。その後、多くの参加者がひきつづき花会式を見学した。かくいう報告者も、声のもつ力に改めて圧倒された一人である。たとえ地元においても、きっかけがないとこの種のものにはなかなか足をはこべないのが実情であり、こうした形での定例研究会の設定は歓迎されよう。

## ■ 研究活動ニュース★

「関西楽理研究会」第99回例会 6月19（土）14時～17時京都女子大音楽棟

1. 演奏と考察：川口 容子 武満 徹「雨の木素描」古典と現代 琵琶演奏：葉衛陽
2. 演奏と解説：小林 幸男 中国琵琶

「関西楽理研究会」は、京都女子大学と京都教育大学における年4回の例会の開催と、機関誌『関西楽理研製の年1回の発行を主な活動としていますが、主に関西で活躍する、幅広い分野の音楽研究者・演奏家で構成されています。昭和49年12月に発足したこの会も、すでに15号の機関紙を発行し、今年9月には100回目の例会を迎えます。アット・ホームな雰囲気の中で発表でき、また幅広い分野の会員と意見交換できるという特色があり、若手研究者も多く参加しています。関西以外に在住の方も参加しています。関心をお持ちの方は鈴木（TEL075-391-4536）までご連絡下さい。

## ★ 関西支部からのお知らせ ★

●鳥取県企画部文化振興課から「第11回「ふるさと」音楽賞日本創作童謡コンクール作品募集について」という依頼状が、関西支部にとどいています。詳細をご覧になりたい方は、支部事務局までお問い合わせください。応募締切は7月12日（月）です。

### ● 入会申し込み方法・住所の変更について

入会ご希望の方は、80円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせください。

〒110-0001台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号

（社）東洋音楽学会 冠03-3823-5173 FAX 03-3823-5174

電子メール LDT01776@nifty. ne. jp

### ● 関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

研究発表等は下記の事務局までお申し込みください。その際、発表の種別（連続講座「伝承を考える」、研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など）、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記してください。

（社）東洋音楽会関西支部

〒673-1494 加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学芸術系教育講座 水野

研究室気付 TEL&FAX 0795-44-2261 FAX 専用 0795-44-2259

電子メール mizuno@art. hyogo-u. ac. jp